

## 論文の内容の要旨

### 異世代間シェア居住の可能性

- アメリカの事例に見る持ち家住宅を活用した人間関係形成に関する考察-

宮原 真美子

住まいは依然核家族を中心に供給されており、これからも増加し続けると考えられる単身者や世代間共生からの視点での住宅供給の試みが少ないこと、また、本来であれば、いかに独立性を維持しながら共助を生活の中に取り込めるかは単身者居住を考える上で無視出来ないことであるが、これまでの単身者の居住環境は、プライバシーに対して敏感になり独立性や孤立性を求める流れであった点を問題意識として取り組んでいる。そこで、本研究では、高齢者が所有する住宅もしくは同一敷地内で行なう異世代間のシェア居住に着目し、高齢者の持ち家を活用して行なわれるシェア生活の中で築かれる人間関係の形成過程を、居住者の交流時の居方から住宅内のプライバシーとコミュニケーションの均衡の保ち方から明らかにし、異世代間シェア居住の可能性を、考察することを試みるものである。

第1章では、単身者の居住環境に関わる現状と希薄化する単身者居住に関わるコミュニティの問題点を指摘し、単身者が増加する中、これまでの様に定住する人を対象としたコミュニティのあり方のみではなく、アドホックなコミュニティ形成の必要性を課題として設定した。また、コミュニティにおける、建築空間、都市空間など物的な捉え方と、人と人のネットワーク的な捉え方の双方を踏まえ、本研究の分析フレームを記述した。

第2章では、調査対象概要を記述している。まず、世帯・住宅・賃料など調査対象エリアの基礎的情報と、調査対象であるホームシェアプログラム仲介団体HIP Housing とサンタクルーズ Accessory Dwelling Units Program の概要をまとめた。次に、第5章で分析対象となるアメリカ住宅の間取りの変遷を、ホームやプライバシーの概念の変化が間取りに与えた影響に注目して概観している。また2章の最後では、現在のあつまって住まう形を住宅や暮らしの共同性、運営・管理手法、所有形態等を軸に分類整理し、本研究のテーマである、住宅を所有するオーナー宅で行なうシェア居住の定義を行なっている。

第3章では、ホームシェアの特性を把握するために、日本でも近年若年単身者の一居住スタイルとなりつつある同世代で行なわれているルームシェアと比較しながら、その生活・居住環境の実態を明らかにした。その結果、ルームシェアでは、一緒に食事をしたり一緒にテレビをみたり、行為の共有が多いことが分かった。また、そのような行為の共有を通して、安心・安全など心的評価を得ている。一方のホームシェアでは居住者間での主な交流が挨拶と会話が中心であり行為の共有は少ない。また居室面積や設備数の充実により居住者間による空間の使い分けが行なわれ、個人空間の独立性を維持しながらも一つ屋根の下で暮らす中で何らかの安心や安全を感じていることを明らかとした。ここに、非家族との生活であるホームシェアにおいては、一つ屋根を共有した結果、個々人が物理的空間の独立性を維持しながらも、それを超えて居住者間でお互いの気配や、安心・安全を感じる認識の範囲が存在していることを把握し、その根本に家族が住んだ住

宅でホームシェアが行なわれていることに関わりがあるのではと推察した。この認識の範囲は、地縁によるものでも血縁によるものでもない何かしらの生活単位のコミュニティであり、そこに、家族で住んだ家で行なわれるシェア居住の意味があるのでないかという推察を行ない4,5章での課題とした。

第4,5章では、オーナーの所有する住宅でのシェア居住に着目し、その調査対象を、①. 自宅の空室を活用して行なうホームシェア事例と、②. 自宅(敷地内)に所有する Accessory Dwelling Unit を活用して行なうシェア居住として、4章ではそこでの生活実態を詳細に記述し、5章では、これらのシェア生活の中で築かれる人間関係の形成過程を、居住者の交流時の居方から住宅内でのプライバシーとコミュニケーションの均衡の保ち方から明らかにし、またそれを可能とするアメリカの住宅の間取りの特徴について論じた。調査対象の住宅の間取りは、多くが1930年代以降カリフォルニアを中心に普及したランチタイプの住宅の特徴を持つものであった。このタイプの住宅(間取り)の特徴としては、①. 男女は別の領域を持つべきという19世紀初頭から続いた考えから夫婦のための寝室へという意識の変化によって生まれた「マスターベッドルーム」、②. プライベートを家の中で守ることに注意が払われた結果生じた「バスルームの複数化」が挙げられる。また、1940-50年代に、多くの住宅がガレージや地下に、独立したキッチン・寝室・水廻り空間を持つ生活ユニットであるADUsを増築した。これの住居ユニットは、一人暮らしに不安を覚える高齢の家族用に使用されたため mother in law apartment, granny units と呼ばれたり、また、モーゲッジを補充するための副収入を得る方法として使用されるため secondary apartment, accessory apartment として呼ばれたりしてきた。現在、ADUs 建設は法的に禁止されているが、1950年から80年代までの期間に増築されたり、中古住宅として購入した時に既にADUsを有している住宅も多い。この様に、家族に対する概念や、プライベートの考え方の変化にもなって発生したマスターベッドルームや設備に複数化、ADUs という別世帯を家の中に有するなどアメリカ住宅に見られる各居室の独立性は、非家族での生活へ移行した場合においても、有効に働いていることが分かった。次に、住宅内で、偶発的な交流時の居住者の居方と距離について考察を進めた。その結果、間取り分類①~③の事例では、共有空間で何かしらの交流が生じる際の居住者の居方は、ある一定の距離が見られ、“会話をしようと思えば出来る距離”であり、また“表情などもわかり挨拶をかわし、話かけることを始めるなど何らかの関わり合いになる距離”であり、その域の間で、居住者プライバシーとかかわり合いの均衡を保っていると考えられる。また、同じ場所に居ても、ある一定距離を保ちながら、別のことを出来る距離でもある。ひとつ屋根の下一緒に暮らす中で、人間関係が親密な関係へと変わっていくことも十分あるし、それは喜ばしいことである。しかし、ここで、「空間共有域」や「相互認識域」といった距離を一定保つことに注目したのは、それがより親密な関係へと変わり得るからではなく、このように居住者間である一定の距離を維持しながらも、日常での些細な出来事を話す楽しみやいざという時の安心感があるからであり、それが失われた孤立した居住環境に問題があると考えられるからである。このように共有空間で一定の距離を保つことを可能にしているのは、アメリカ住宅の共有空間の形状や機能の重複性にあると考えられる。共有空間に、フォーマルなリビングとファミリールーム(インフォーマルなリビング)やダイニングとキッチンリビング(ダイニングスペースなどマルチスペース)などアメリカ住宅内に見られる公私の重層性が、シェア居住で非血縁関係の他人と住む時に、機能の重複性として現れ、居住者に場所の選択を可能にしていると考えられる。

第6章では、本研究の結語として、第1章から第5章までをまとめ総括した。単身者が自らの意思で住居環境を維持していくためにはさまざまなサポートが必要であり、また人との交流は必要である。どのような人的ネットワークをもっているのかが、生活状況を大きく左右すると考えられる。単身者が独立性を維持した上で、ホームシェアで得られているような安心感など精神的効果を得ることができる居住環境が選択肢の一つとなることが重要となってくると言える。社会学者のレイ・オールデンバーグは、家庭でも職場でも

ないサードプレイスが果たす役割を示したが、サードプレイスを持つ為にも、ファーストプレイスである住む場所、セカンドプレイスである働く場所が安定している必要がある。それぞれの場所での人間のつながり（コミュニティ）が必要であり、ファーストプレイスを中心とした人とのつながり、かつては、家族であり地域であり、そこでは、誰もが地域のメンバーを把握し近隣で何が御起こっているのか把握している存在がいる。オーナーが所有する住宅でのシェア居住を通して、ファーストプレイスでの人とのつながりが派生している。そこでは、一緒に事をするための場所というよりは、挨拶やちょっとした会話など近隣関係のような交流、居方が見られる場所であった。たとえ同じことをするにしても、ダイニングとリビングキッチン（eat-in スペースなど）とで居住者による使い分けが見られるなど、さまざまな使い方を許容する空間があることも、共有空間でコミュニケーションとプライバシーの均衡を保つ居方を可能としている。また廊下から直接各自の居室に入る動線ではなく、リビングアクセス型の住宅が多く、ある一定の距離を保ちつつも、お互いを“空間を共有”“認識出来る距離”であり、挨拶やちょっとした立ち話などが起こる距離を保っているのも一つの特徴と言える。そのようなちょっとした挨拶や、自分のことを知っている人が近くにいるということが、居住者に、時に煩わしさを伴うことはあるが、安心感やゴミ捨てなど敷地内での責任感が発生し、秩序を維持出来ている理由と考えられる。その背景に、アメリカ住宅の間取りの特徴が挙げられる。戦後大きくなり続けたアメリカ住宅では、一住戸内にフォーマルなリビングルームとプライベートなファミリールーム、ダイニングとリビングダイニング（キッチン内のマルチスペース）、複数のバスルームなど、住宅内における公私の重層性がある。また共用部は、袖壁などで緩やかに分割されてはいるものの、一連の連なる空間であることが分かる。フォーマル/インフォーマルといった公私の重層性は、シェア居住へ移行した際には機能の重複となって現れ、お互いの気配を感じるなど、一つの空間を共有しているという意識は芽生える一方、居住者間で一定の距離を保つことを可能にしていると考えられる。